
謝 辞

佐藤 和哉

川端康雄教授は、2002年の着任以来、21年の長きにわたって、本学英文学科のイギリス文化研究を強力に牽引してくださいました。この間、英文学科長、大学院英文学専攻主任、さらには文学研究科委員長を歴任されたほか、大学全体に関わる学務に関しましても、学務部長や大学院担当理事、そして大学人事検討委員会委員長など、数々の要職にお就きになり、実に多方面にわたって日本女子大学にご貢献くださいました。

教育においては、学部では、イギリス文化研究の根幹となる「イギリス文化講義」をご担当くださったほか、「イギリス文化演習Ⅰ」「同Ⅱ」では、きめ細やかに学生をご指導くださいました。大学院においては、中心となる授業科目の「イギリス文化講義」だけでなく、本来のご担当コマからの持ち出しまでされて「西洋古典・中世文学特論」の担当をお引き受けくださり、オヴィディウスなどの古典ラテン文学や、チョーサーなどの中英語の作品についてもご講義くださいました。このような先生の薫陶を受け、先生のもとから、イギリス文学研究、文化研究の次世代を担う研究者が数多く羽ばたいて行きました。

川端先生のイギリス文化研究に関する教育に対する貢献といたしましては、本学の内部に留まらず、誇張ではなく日本全国におけるイギリス地域文化研究の教育への貢献として、この分野では希有と言える教科書、『愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950年』（2007年）と『同 1951-2010年』（2011年）（ともに慶應義塾大学出版会）を編纂されたことを挙げなければなりません。この2冊の教科書には、それぞれの章として、一編一編が独

立した論文とも言えるような論考が一流の執筆陣によって書かれており、しかもそれらがほぼ編年的に並べられて、全体として20世紀～21世紀初頭のイギリス像を立体的に浮かび上がらせる構成になっています。川端先生は、この2冊の全体を統括されており、総計で約30名にも及ぶ、さまざまな方面で日本のイギリス文化研究を代表する研究者が、川端先生のお人柄を慕って集まってこの2冊を作り上げたという点に、先生の、まさに「人徳」を伺い知ることができます。

先生の教育者としての側面は、2005年にみずず書房「理想の教室」シリーズの1冊として刊行された『『動物農場』ことば・政治・歌』にもよく表れています。この本では、高校生を中心とした若い読者に対して、歴史との関連だけでなく、「音」の面白さや文学的なしなやかさにも着目しながら『動物農場』を読むことの重要性を、平易に説いていらっしゃいます。良著の多いこのシリーズのなかでも白眉と言えます。

川端先生のご研究はたいへん広範にわたり、安易な総括は凡夫のよくするところではありませんが、あえてまとめるとするならば、まずは、先生が追求された、ウィリアム・モリス、ジョージ・オーウェル、そしてレイモンド・ウィリアムズにいたる、19世紀から20世紀にかけての芸術家・思想家の流れを挙げなければなりません。それぞれの人物が、思想家、芸術家（デザイナー、詩人、小説家、エッセイストなど）として、一つの分野に留まらず広範囲に活動しており、その意味では、これらの人物に着目してご研究になることそのものが、まさにイギリス文化研究を体現しているとも言えます。愚見ですが、先生がこれらの著述家たちの研究を通じて追求していらっしゃったのは、「イギリス的社会主義」とでも表現すべき、言葉の正しい意味における社会主義の伝統をたどり、イギリス文化の一つの本質に到達しようという試みではないか、と私は密かに考えています。

単著としては、『オーウェルのマザー・グース——歌の力、語りの力』（平

凡社、1998年)以来、先ほど挙げたご著書もそうですが、岩波新書の『ジョージ・オーウェル』(2020年)、それから最新刊の『オーウェル『一九八四年』——ディストピアを生き抜くために』(慶應義塾大学出版会、2022年)にいたるまで、一貫してオーウェルに関するご研究をまとめていらっしゃいます。これらのご研究のなかで、先生は、徒に銜学に走ることなく、しかし確かな言葉で、しばしば誤解されやすい、この作家のさまざまな側面、とくに政治と美学のインターフェイスについて語ってくださり、この作家についての私たちの理解を塗り替えてくださいました。また、『ウィリアム・モリスの遺した物——デザイン・社会主義・手しごと・文字』(岩波書店、2016年)では、モリスの多方面にわたる活動を俯瞰し、包括的なビジョンで示してくださいました。

さらには、『葉蘭をめぐる冒険』(みすず書房、2013年)や前出の教科書に見られるような、広い範囲のイギリス文化に関わるお仕事、ラファエロ前派を中心とする美術・芸術についての論考のほか、未訳、既訳を問わず、ウィリアムス・モリスの作品(講演を含む)や、レイモンド・ウィリアムズの論考など、さまざまなテキストの翻訳によっても、わたしたちのイギリス文化への理解に深みと刺激を与え、啓発してくださいました。

先生が、レイモンド・ウィリアムズ研究会を主催されるほか、日本ワールド協会や日本ヴィクトリア朝文化研究学会で会長を努められるなど、常に、多くの研究者のかたがたと関わり、また多くのかたがたの研究を支えるように活動されていたことは、近くで拝見していて、まさに研究者の一つのあるべき姿を、身をもって教えてくださっていたように感じています。

ここでご紹介できたことは、きわめて広範囲にわたる先生のお仕事のごく一端に過ぎませんが、日本女子大学が、そして日本のイギリス文化研究が先生から受けたご恩をわずかでもお示ししたく、拙文をしたための次第です。今後の先生の、ますますのご健筆を祈ってやみません。
